西陣明治の群像⑫

新時代の機業家

佐々木清七

明治六年、フランスのリヨンより導入されたジャカードは府営織工場（後に織殿となる）に設置されただけで、西陣の機業家はほとんど興味すら示さなかった。そのなかで唯一人ひそかに着目していた機業家がいる。佐々木清七である（当時、堀川通寺ノ内上ル東西町に在住）。

ジャカードによる織物の工業生産は、明治十二年に荒木製国産機を用いた長嶋九郎兵衛に始っている。だが長嶋工場の紋織は市場に受け入れられなかった。佐々木の荒木製国産機導入は明治十三年であるが、市場の評判も良く、佐々木織として成功を収める。

佐々木清七の機業家としての成功の要因は企業家としての先見性にあると思われる。

佐々木は逸早くフランス製ジャカードを購入し、機織の研究を進め、明治十一年にはすでに広幅女帯地製織に成功するなど、新しい技術に素早く対応していた。それにもとづいて、ジャカードの特徴をよく見きわめた上で、その長所を活かした新しい紋織をめざした。鹿子織、蓬莱織の発明に佐々木の機業家としての独自性が発揮されている。

なかでも最も注目されるのは、佐々木は機職人というよりも事業家に徹したということである。

それまでの機業家といえば、自身もすぐれた機職人であり、経営者であるとともに技術者であった。佐々木はジャカードを導入すると、織殿民営化によって教授の職を解かれた佐倉常七（明治五年リヨンに渡り、一年の留学を経てジャカードとその織法を初めてわが国に伝えた）など、すぐれた技術者を結集し、自らは経営者として、つねに事業と業界活動に専念していた。西陣織物製造業組合の組長を務め、後に商工会議所議員にも選ばれている。

このように経営者としての才幹にめぐまれていた佐々木清七をみるとき、そこに近代西陣の新しい機業家の息吹きが感じられる。（福本武久）